平成 29 年度 長崎市自然環境調査報告書：植物

長崎市自然環境調査委員　中西　弘樹

Ⅰ．新しく発見された長崎市新産のもの

〇クロヤツシロラン（ラン科）女の都（4929-16-59）、昭和（4929-17-50）

ヤツシロラン類は高さ数センチ以下の葉をもたない腐生ランで、常緑樹林や竹林の林床に生育しています。県内にはこれまで 4 種が知られていますが、目立たないために報告例は少ないようです。秋咲きのものはアキザキヤツシロランとクロヤツシロランの種があり、いずれも竹林に多いことが知られています。長崎市では昭和町付近の竹林で発見することができましたが、各地の竹林に分布しているものと思われます。

図１．クロヤツシロランの果実

〇タカオシケチシダ（ヒメシダ科）琴海村松町風明南西部（4929-26-40）

シケチシダは湿った林床に生育する夏緑性のシダで、羽軸と葉柄に毛があるものはタカオシケチシダの品種として区別されています。林道沿いに群生しており、県内ではまれに見られます。

〇オオバヤドリギ（ヤドリギ科）琴海戸根町（4929-26-72）

大村市、諫早市、対馬市、壱岐市、小値賀町に知られていましたが、長崎市では初めて発見されました。杜が丘花園公園に 1 本の大きなムクノキ（高さ約 15m、胸高直径 65cm）のこずえに寄生しています。

Ⅱ．新しく発見された外来植物

〇ハナヤエムグラ（アカネ科）長崎市唐八景（4929-07-51）

ヨーロッパ原産の越年草で、世界各地に帰化しています。道路沿いの草むらに生育していました。ヤエムグラに似ていますが、薄紅色の花を咲かせます。

〇コエビソウ（キツネノマゴ科）三川町下鳥家（4929-17-41）

メキシコ原産の常緑矮小低木、高さ 30～60cm。冬から春にかけて茎の先端に総状花序をつけ、苞が赤色をしています。その形がエビの尾のように見えることから、名づけられました。長崎県ではしばしば庭に栽培されているのを見かけますが、捨てられたものが野生化していることがあります。

〇ハナウリクサ（ゴマノハグサ科）長崎市琴海大平町元越（4929-36-44）

一名トレニア、インドシナ原産の園芸植物で、水田の縁などやや湿った所に逸出帰化しています。

○マルバハッカ（シソ科）長崎市琴海大平町元越（4929-36-44）

ハーブの一種として導入され、栽培されていたものですが、各地の人家付近に広がっています。

いくつかのハッカの仲間が野生化していますが、本種は葉の先端が円頭で、縮んだように葉脈がへこんでいることで容易に区別できます。

図 2. ハナウリクサ

Ⅲ. 発見された貴重植物

○カンラン（ラン科）旧長崎市北部

本州南部以南に分布するラン科植物で、マニアの盗掘にあい、今では野生株の花を見ることはできなくなったと言われています。県内では広く分布していると思われますが、全国各地からマニアが訪れ、今ではほとんど野生のものは見られなくなりました。しかし、旧長崎市北部において、発見することができました。葉はシュンランと似ていますが、葉縁はシュンランのように細かい鋸歯はなく、滑らかです。また、若い葉は垂れることはなく、上に伸びます。

○コムラサキシキブ（クマツヅラ科）琴海村松町風明南西部（4929-26-40）

湿地などに生育する落葉低木で、これまでは風早の湿地で知られているだけでした。

○ハンカイソウ（キク科）大山町鹿尾ダム上流部（4929-06-39）

五島列島や平戸島など離島では低地にも生育していますが、本土側ではやや海抜の高い所に生育しています。上記の地は 20 年ほど前に発見したもので、長崎市では唯一の生育地であります。その後シカの食害を受けて見られなくなりましたが、再び出現しました。しかし、花が咲くような株にはなっていません。何らかの保護対策が必要であります。長崎市のレッドリストにありませんが、絶滅寸前の状態にありＣＲ（絶滅危惧ＩＡ類）に該当します。

○ヒモヅル（ヒカゲノカズラ科）琴海尾戸町浦底（4929-36-25）、琴海形上町北部（4929-36-42）

レッドデータブックカテゴリー：市：VU、県：VU、環境省：VU

図３．ヒモヅルの群落

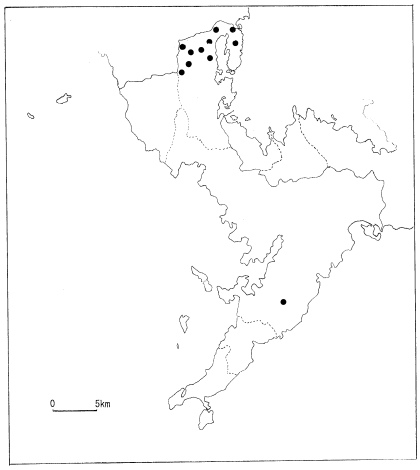

図４．長崎市のヒモヅルの分布

琴海尾戸町は 2 株、琴海形上町北部は 50 株程度が生育していました。本種は紀伊半島と九州南部にまれに分布するつる性のシダで、木によじ登り、高さ数mに伸びます。旧琴海町から西彼町にかけては生育地が多く、恐らく全国で最も多産する地域でしょう。

Ⅳ. 絶滅しつつある代表的な植物

○コモウセンゴケ

コモウセンゴケはオーストラリア、ニュージーランドから東南アジア、中国、日本に分布し、日本では東北地方南部から太平洋側を関東南部、東海地方、紀伊半島、四国、山口県、九州、琉球列島に分布しています。九州では宮崎県、鹿児島県、長崎県に知られ、長崎県が最も生育地が多いです。長崎県では長崎市旧琴海町から西海市西彼町にかけて集中的に生育しています。長崎県も長崎市も準絶滅危惧種に指定していますが、あいかわらず減少傾向は続き、特に最近になって生育地が急激に少なくなってきています。その現状を以下に紹介します。

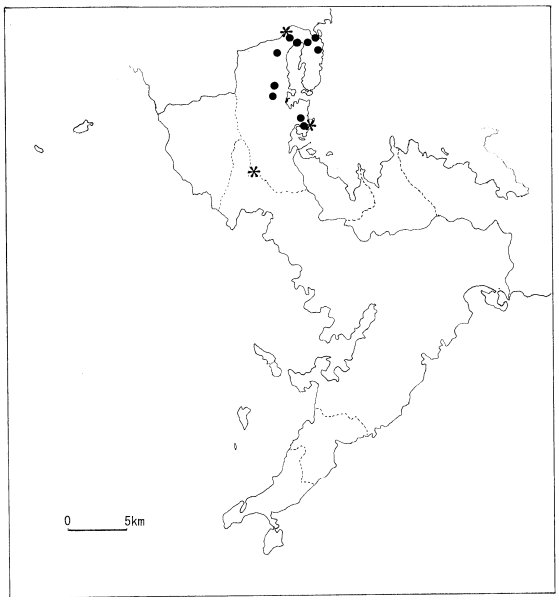

図５．長崎市のコモウセンゴケの分布

開発による立地の消失：バブル崩壊後、開発による植物の絶滅は少なくなりましたが、最近になって丘陵地に太陽光発電所ができ、コモウセンゴケも消失したところがあります。西海町樫の久保（4929-26-10）は長崎県の分布の南限地でありましたが、太陽光発電所の建設のために消失しました。

造成地などの放棄：コモウセンゴケの種子は極めて小さく、風によって種子散布されます。したがって、造成地のやや湿っている所には、先駆的に生育することがあります。琴海戸根町の造成地（4929-26-64）では、2000 年に、一面にコモウセンゴケが生育していたのを発見したことがあります。しかし、チガヤやが優占した草地になり、2017 年にはすっかり消失していました。琴海大平町大江（4929-36-42）の国道沿いにグランド予定地として造成された土地に 1985 年頃はコモウセンゴケが多く生育していましたが、その後遷移が進んで、消失しました。

水田の放棄：コモウセンゴケの最も多い生育地は、山間地にある水田の縁で、適度に湿り気があり、日当たりもよく、毎年草刈りが行われている所です。しかし、水田を放棄すると、縁の草刈りが行われなくなり、ススキやコシダが多い、日陰となるため、コモウセンゴケが生育しなくなっている所が多くなりました。

切通しの植生遷移：道路の切通し面は、日当たりもよく湿った所は、コモウセンゴケが多く生育しています。しかし、コシダやミズスギ、ススキなど他の植物が少しずつ侵入し、被ってくるとコモウセンゴケが生育しなくなります。